

日本女性財団 理事・事務局長 内田容子

1994年、私は東芝グループに入社、石炭火力発電の海外営業部門に配属され、発電所をつくり、電力を供給するため、日本の商社やメーカー、海外の企業の方々と共に仕事をしていました。そこには人種を超えた素晴らしいチームがありました。また、海外出張にいくと、女性が妊娠中の大きなお腹のまま、私と同じように他国に赴いていたのも印象的でした。それから、同じく東芝グループの中で、広報・広告・イベントなどを担当。今度は国内外のさまざまな企業の経営トップや広報担当の方と仕事をし、社会の中で企業がどのような役割を担っているのかを肌で感じました。

私は会社の制度を活用し、フルタイムで働きながら3人の子どもを育てています。子どもたちが小さい頃、夫は年間3分の2ほど、海外を飛び回る仕事でしたので、保護者の仲間たちが助けてくれました。私が海外出張の時には、両親が1ヶ月に1回だけの約束で、泊まりに来て子どもたちの面倒を見てくれました。子どもたちの急な発熱や学校行事の時には、勤務先の上司や同僚が私の仕事を代わりに手伝ってくださいました。いつも私は誰かに助けられていました。

そして50歳になる手前で、女性たちを助けるために財団を立ち上げたいという対馬ルリ子先生の熱い想いに触れ、今度は私が誰かの役に立つようになろう。と思いました。私は、医師でも経営者でも政治家でもありません。しかし、会社員であり母親である私だからこそ、できることがある。そう信じ、日本女性財団の立ち上げに参画することといたしました。

日本女性財団の設立の背景には、日本における女性のさまざまな課題があります。特に、困っている女性たちの窮状は、会社員の私が考えていたそれよりも遥かに深刻でした。現場には、耳を塞ぎたくないような切ない話が多くありました。法律や制度、ルールや仕組み作りが足りていない部分があるのもわかりました。アクションしないと、これらの課題は解決しませんし、未来も変わりません。

本財団は、女性たちを助けるために、資金を集め、人を繋ぎ、知識と知恵と人々のパワーを結集し、動いていきます。社会をより良く変えていくために動く船です。女性たちのためにアクションしよう！皆さんがそう思ってくださいれば、この船は、課題解決に向かって、もっと動くと思います。女性たちのためにできること、女性たちのためにしたいことを考え、この船を使って実現していただきたいのです。

皆さまのお力添えを、心よりお願い申し上げます。

2020年8月吉日